

ガチンコと八百長 — 大相撲のスポーツ社会学 —

柏 原 全 孝

Serious or Fixed?: Sociological Thoughts on Grand Sumo

Masataka KASHIHARA

要 約

2011年2月に発覚した大相撲の八百長は、過去に例のない理由によって本場所そのものを中止するほどの大騒動となった。大相撲と八百長の関係は、番付という独特のランキング制度が力士たちに対して持つ現実的な影響力の大きさと、番付に付着する幻想に由来する。多くのメディアが八百長を批判したが、ガチンコ勝負を当然のこととして考えることは必ずしも正しい姿勢ではない。大相撲の八百長は、発覚もしにくければ発見も難しく、ガチンコとの線引きも困難で、捕らえ所のない亡霊的な面を持つことを認識しなければならない。

あらかじめ勝敗を決めた予定調和的な八百長に対し、ガチンコは賭博的な面を持つ。未来を可知化するべく稽古を積みながらも、未来の不可知性に勝負を送り込むガチンコ力士たちの賭博的な姿勢を擁護することによってしか八百長という亡霊には対処できない。

キーワード：大相撲、賭博、八百長、ガチンコ、行司、審判

1. はじめに

21世紀に大相撲は苦難の時を迎えた¹⁾。さまざまな出来事が不祥事として問題化され、その対応の不適切さを指摘され続けてきた。力士暴行死事件は論外の不祥事だが、横綱の品格から暴力団との関係、野球賭博等々、違法なものからそうでないものまでが不祥事として批判対象となってきた。その流れの最後に2011年の八百長メール問題がやってきた。本稿は、この八百長を大相撲との関係において解釈する試みである。八百長は、あらかじめ勝ち負けを決めている。そこで、大相撲における勝敗をその制度から考察することから始め、八百長の解釈を試みたいと思う。

2. 大相撲とスポーツらしさ

角界は、幕末期の隆盛の後、明治維新に際して、幕藩体制と結びついた興行システムからの脱却を余儀なくされた。大名という大きなスポンサーを失い、裸体の是非の問題から相撲禁止論まで浮上するなか、経済的に自立した興行を可能にするシステムへと変容し生き残りをはかった。江戸、京都、大阪の三都の協力と対抗、さらに繰り返す内紛や脱退騒動など、近代相撲史はじつに波乱に満ちている。角界は、現在に至るまで、土俵内外のさまざまな話題を提供し続けてきたのだ。その中で、角界は柔軟に変容することを厭わず、今の相撲という形でのスポーツ興行を生み出したのである。

相撲がスポーツの一競技であるという認識が定着していることに議論の余地はない²⁾。しかし、近代的なスポーツ性を身に付けるようになったのは、相撲史のなかではかなり最近のことである。元来、個々の取組は、勝負を競っていたわけであるが、興行として発達した江戸時代には多分に見世物としての性格があり、写楽にも描かれた大童山のように、子供ながら醜名を与えられて土俵入りを披露していた例などは、そうした性格をよく表していただろう（宮本 2009: 85-87）。大相撲にスポーツ性が宿り始めたのは、1909年の国技館の完成にあわせて始まった東西の団体優勝制度、さらに、1926年の個人優勝制度が、きっかけと考えられる。「優勝を争うという明確な目標が設定されたことによって、従来とは段違いの「勝敗へのこだわり」が生まれ、いきおい土俵上の取組も、勝敗を争う厳しさを増してゆく。加えて、団体戦の形式が東西両陣営の対抗意識をあおり、合同稽古が盛んとなるなど、技量向上に資するところが大きかった。…従来かなりの数にのぼっていた引分・預などは、これを機にしだいに減少傾向を示し、大正末の個人優勝制度化に際して原則廃止されることになる」（新田 2010: 290）。大相撲が身に付けたスポーツらしさは大相撲興行の大きな魅力となった。その制度改革からほどなくして登場した大スターが双葉山であるが、彼を不世出の横綱として後世に語らしめるのは、彼の「品格」以上に、優勝回数と連勝という2つの記録である。言うまでもなく、数量化と記録の追及は近代スポーツの本質的な特徴

である。双葉山以降、大鵬、千代の富士、貴乃花といった大横綱と呼ばれる面々は、「品格」もさることながら、優勝回数や連勝の記録によって大横綱なのである³⁾。

大相撲がスポーツらしさを身に付けるようになったとき生じた大きな変化は一番一番の勝敗判定の明確化と厳密化であった。勝敗のつかない引分や預はなくなり、さらに不戦勝不戦敗制度も個人優勝制度とほぼ同じ時期、1927年に導入されている。それによって、曖昧な勝負はなくなり、力士たちは、自身の勝ち越し負け越しを以前にもまして意識せざるを得なくなった⁴⁾。勝ち越し負け越しのみならず、どれだけ勝ち（負け）越すかが番付に直結するようになる。優勝争いに関係のない力士たちにも引分の消滅は、大きな影響を与えることになった。結果的に、優勝制度の導入やそれに関連して生じた引分等の廃止は、番付という大相撲独自のランキング制度の重みを増すことになった。一つ一つの取組の勝敗判定は、以前に増して力士の待遇を左右するものになる。大相撲ではこの勝敗判定を、行司と審判委員が担っているわけだが、ここには勝敗判定の重みへの配慮を感じさせるユニークな特徴があるので、詳しくみていくことにしよう。

3. 行司と審判

大相撲の取組において、行司は「競技の進行および勝負の判定を決するもの」（「審判規則 行司」第二条）と規定されており、力士を立ち合わせ、勝ち名乗りまでの進行を司るのが役割である⁵⁾。他の競技における主審やレフェリーに近いイメージで捉えられることが多いが、行司の勝負判定については「勝負決定の軍配を東西いずれに上げても、審判委員または控え力士からその判定に異議を申し出られると、拒否することができない」（同 第十六条）。その上、「異議申し立ての物言い後の判定は、審判委員に一任する」（同 第十七条）とされ、物言いがついた時点で、「軍配通り」であろうと「行司差し違え」であろうと行司は審判委員の判定結果に従うほかない。物言いがついた場合、行司は審判委員の協議に参加できるが裁定に加わることはできない。また、反則行為などの判断は審判委員が行うことになっており（「審判規則 審判委員」第七条）、髪をつかむなどの明らかな反則行為が行われたとしても、行司はそれを自分の軍配に反映させることができない。行司は、取組を仕切る主審のような立場ではあるが、勝負判定の最終的な権限はないのである。

大相撲における行司のユニークさの一つは、勝負判定の最終権限がないにもかかわらず、大きな判定責任を負っている点にある。たとえば、行司最高位の立行司の場合、行司差し違えがあると、進退伺いを理事長に対して行うことが定例となっている。そのことと関連付けて、立行司の身に付ける短刀について、差し違えた場合に切腹する覚悟を示すものであるという説明がなされることがあるが、歴史的には短刀にそのような意味があるわけではない（根間 2010）。しかし、短刀の意味を誤解させる程度には、差し違えが行司生命に関わる失策とみなされる。実際に差し違えを理由に行司を辞した例はわずかしかないが、手続き上、理事長は進退伺いを受理して立行

司を退職させることも可能であり、勝敗に関して行司の負う責務は与えられた権限以上である。

勝敗に関して行司という立場が抱える相反的な面は、必ずしも大相撲特有というわけではない。たとえば、レスリングではレフリー、ジャッジ、マットチェアマンの3人が審判団を構成し、そのなかでレフリーが行司のように試合進行をコントロールする立場にある。勝敗に関わる種々の技術的判断をレフリーとジャッジが行うが、両者で見解が相違した場合、マットチェアマンが判定に加わって裁定する。過半数の決定権を握るのはレフリーではなくマットチェアマンである。さらに、マットチェアマンは「レフリー並びにジャッジの重大な過誤に対して、試合の中断を求めることができる」（「レスリング国際ルール」第21条h）。つまり、「物言い」ができる。レスリングでは審判団3名のほか、ジュリー（裁定委員）も「物言い」の権利を持っている。審判団の協議には参加できないし、審判団がジュリーの「物言い」に基づいて判定した結果を覆すまでの権限はないが、審判団の「明確な処置間違い」や「技術的処置が明らかに間違っている場合」は一度出された判定に再度の「物言い」ができる（「レスリング国際ルール」第22条）。

大相撲と関係の深いアマチュア相撲ではどうだろう。国際ルールでは審判団は6人で構成され、主審、行司（レフェリー）、審判4名から成る。その中でレフェリーたる行司は土俵上の進行を管理するとともに、反則行為の判断しなければならない。反則の判断が審判委員に委ねられている大相撲とはこの点が異なる。が、判定をめぐる協議が行われた場合、その裁定に加わることができない点は、大相撲と変わらない。ただし、アマチュア相撲では裁定が多数決で行われることが規定されており、奇数の5名であれば必ず判定を下すことができるので、行司が多数決に参加しないのはその点で合理的である。ちなみに、大相撲で協議が行われる場合は多数決を想定していないこともあって、審判規則では審判を4名ないし5名として、やや曖昧な記載となっている⁶⁾。

レスリングでもアマチュア相撲でも、行司（レフェリー）は勝敗判定を行う立場にはあるが、その最終権限はない。試合進行を取り仕切ることに於いて、勝敗判定、反則判定、その他技術的判断を行うが、その時の判断が最終的な判断とはならない。

技術に関する判定の積み重ねが勝敗を左右するレスリングや、レスリングほどではなくとも技の決まり具合を判定しポイント化する柔道とは異なり、勝敗が比較的シンプルでポイント制ではない相撲が、行司と審判の合理的な分業体制を以前から持っているのは興味深い点である。このような分業は優勝制度の創設以前に遡り、少なくとも1886年（明治19年）に改正された「角舩仲間申合規則」には勝負検査役の記載が見える（第四条）。勝負検査役は、現在の審判委員同様の役割を持っていた。10年後に改正された「東京大角舩協会申合規約」〔1896〕ではより詳しく「検査役は二期大角舩興行の節角舩の勝負を実検して之れを記録し又引分預り等の処置を為し且つ本規約に随ひ諸般の事務を取扱ものとす」（第九条）とされた。この時の改正は改正前の「角舩仲間申合規則」が全十二条から成るものであったのに対し、全七十条に変貌する大改正であったため、記載内容は実に細かい。現在の相撲協会の「寄附行為」やその他の諸規程が網羅された内容

となっている。たとえば、現代では行司の待遇（位階）は理事会に委ねられているが、この「規約」では「取締役及検査役協議の上」とされ、現在でいうところの理事長と審判部が決するものとなっていた（第卅八条）。勝負検査役と行司の立場の相違がこの時点ではっきりしており、また、勝負判定の厳密化がすでに整備されていたこともわかる。この意味では近代スポーツの発達段階にあって、大相撲の勝負判定システムはかなり先進的であった。もちろん、江戸時代から続く人気興行であり、制度の整備が進む環境があったことが大きいのは当然であるが、近年のスポーツ界が向かう勝負判定における主観性の排除ないし客観性の担保という流れを、少なくとも形式上、大相撲が19世紀から先取りしていた点はもっと強調されて良い⁷⁾。このような先進性は、他競技に先駆けて1969年にはビデオ判定を導入していたことにも表れている。

勝敗の客観性を担保する方策が大相撲において先駆的に採用されてきたのは、先述のように、番付の存在が極めて大きい。しかも、勝敗判定の最終責任を負う審判は番付編成も行う。勝敗判定と番付は、たしかに直結しているのである。規約で確認する限り、遅くとも明治の頃には検査役が番付編成を行うことになっていた。ちなみに、現在の番付編成会議には行司も参加するが、それは書記としてであり、発言権は与えられていない。行司は土俵の上だけで勝敗に関与できるのである。では次に、番付について章を改めて考察しておこう。

4. 番付と幻想

番付はかなり独自の特徴を持ったランキング制度である。力士その他の名前がランキングの差に応じた文字の大きさで記載され、ちょうど出演役者の名前が書かれた芝居の看板のように、興行的機能を持つ。その一方、番付が力士の実力と待遇を表し、力士個人にとっては稽古の動機づけにもなる。現在、多くのスポーツで見られるようになったランキング制度は、公式戦結果に基づいて構成される点においては番付と似ているし、ランキング上位選手の名前自体が興行的な価値を持つ点も似ている。ただし、ランキング順位が影響するのは、本選出場権、シード順位等であり、番付ほど細分化された待遇差を持つわけではない。プロゴルフの場合、年間シード権の獲得は賞金ランキングに基づいて決まる。シード権有無の差は、公式戦出場資格に影響を与える点で大きな差ではあるが、公式戦出場資格を失うこともないし、またすでに得られた賞金に基づくランキングであるため、それによって収入が変わるといってもいい。また、大相撲同様に格闘技であるボクシングのランキングは、タイトルへの挑戦権を示すものであることに加え、実際の挑戦機会が必ずしもランキング通りに与えられるわけでもなく、番付とは大きく異なる性質のものである。

番付はその時点での力士たちの実力を表現するものであり、それゆえ、その実力に見合った待遇が番付に基づいて与えられる。ただし、番付には特殊な幻想が制度的に付着している。なかでももっとも強力な幻想は、横綱の強さに対するそれである。横綱は、出場する以上は毎場所優勝

争いをするだけの勝ち星を求め続けられる。しかも、勝つために土俵上でなしうる戦法、戦術には制約がある。立会いの変化など以ての外であり、相手の動きを受け止めた上で勝つ横綱相撲をしなければならない。不利な環境を与えられた上で勝たねばならない。幻想は、ただ思念的に存在するのではない。たとえば、理事長諮問機関である横綱審議委員会は、横綱幻想から生まれる数々の言説を横綱たちに向けて具体的に発し続ける。幻想はリアルな圧力として横綱にふりかかってくるのである。横綱ほどではないが、大関にも同種の幻想がある。彼らは勝ち越しが半ば義務づけられている。大関には容易に昇進できない代わりに、簡単に陥落しないようになっていくことも、大関への幻想を反映したものと言えるだろう。こうした幻想は、横綱大関の昇進時にみられる伝達式によってもかき立てられる。使者が昇進を伝え、それに力士が口上を述べて受諾する。この形式的な場面は必ずニュース報道もされる。番付がただのランキングではないことが、ここからもよく分かるだろう。

また、十両以上と幕下以下の差は、待遇の差だけではなく、昇進時にはやはり使者による伝達式があること、十両以上には大銀杏が許され、化粧まわしが作られるなど、待遇以外の点にも大きな格差がある。こうした儀礼的な点での格差もまた番付に付着する幻想の維持と構築に寄与する。

ところで、このように番付上位力士たちに向けられる幻想は、大相撲のスポーツ性を揺るがすことになる。ファンが勝利を求めるのは、相撲に限らず、スポーツ全般に見られることである。しかし、横綱に求められるのは、圧倒的な強さを見せるような勝利であり、実際に、それができなければ横綱の地位を失うどころか、競技そのものからの引退を迫られてしまう。特定の地位にある選手に対する特殊でリアルな幻想の存在は、スポーツの建前の一つ、フェアネスを侵害する。

そもそも大相撲が、儀式的な非スポーツ的要素にあふれていることを思えば、横綱の取組においてフェアネスが侵害されていることも驚くには当たらないのかもしれない。大相撲の土俵は女人禁制という性差別が残っている点でも非スポーツ的である⁸⁾。女人禁制も含めて、あえて儀式化、儀礼化を進めて伝統を創出、演出することによって近代スポーツ化したという指摘（トンプソン 1990）もあり、大相撲は非スポーツ的要素の積極的包摂によって人気スポーツとしての地位を獲得しえたのは間違いない。だが、非スポーツ的要素とスポーツ性という、相反するものが同居することによって、スポーツらしさの根幹が掘り崩される可能性はないのだろうか。

儀礼性、儀式性は単純に非スポーツ的というわけではない。オリンピックの開閉会式を見ても、スポーツは全般にそれぞれ多様に儀礼的なもの、儀式的なものを内包している。聖火点灯などあろうとなかろうと、各競技はなんの影響も受けない。土俵入りや仕切りの動作にしても、ムエタイのワイクルーやラグビーのいくつかの代表チームが行うハカなど似たような儀礼行為といかほどの違いがあるだろう。また、興行面から考えるなら、土俵入りは、MLBのセブンス・イニング・ストレッチと同様のファンサービスイベントと変わらない⁹⁾。力士の鬘は競技にとって必要なものではないし、行司の装束にしてもレフェリーとしては明らかに過剰である。だからといって、

審判委員が勝敗の最終責任を負う形にもなっていることで、行司の過剰装束も許容される。つまり、大相撲における儀礼性や儀式性はスポーツであることとの折り合いをつけたところに成立しているわけである。その意味で、さまざまな儀礼的な非スポーツ的要素は大相撲のスポーツ性と共存しているのである。ただし、それらの儀式はあくまでも競技の周辺にある。それが競技そのものに影響を持つのであれば、つまり、勝敗に影響を与えるのであれば、話は違ってくる。

横綱らしさに対する幻想は、明らかに横綱の地位を困難なものにする。ほんの一瞬、足先が土俵を踏み越しても、足裏以外が土俵に触れても負けとなる相撲では、実力差通りに勝敗が決するとは限らない¹⁰⁾。横綱相手に知恵を絞り、全力で挑んでくる「格下」力士たちに偶然が味方をするかもしれないわけではない。ジャイアントキリングは起き得るし、珍しくない。必ずしも「格下」とはいえない三役が相手となるとますます土の付く可能性は高まる。現実には横綱に求められる相撲の取り口の制限と白星という二つの期待は矛盾しているのである。だが、横綱たるものその矛盾を越えた存在でなければならない。ここに根深い大相撲と八百長の結びつきが生まれるきっかけが横たわっている。

5. 八百長

大相撲と八百長の関係は長い。そもそも八百長が相撲に関連して生まれた言葉である。だから、八百長批判の歴史も同様に長い。明治期にはすでになんども新聞紙上で八百長疑惑の取組が指摘されている(西村 2012: 159-177)。そのなかで特に大きな動きであったのは国技館創建(1909)の頃である。はじめての常設館と言うことで注目を集めた国技館創建に際し、友綱部屋の後見人で国技館創建にも尽力した板垣退助は友綱部屋ほか数部屋の関取を集め、八百長排除の契約書に署名捺印させている(風見 2002: 137-136、西村 2012: 161)。この時、友綱部屋の親方(年寄友綱)は取締、現在でいうところの理事長の立場であった。つまり、板垣に促され、角界のトップにあった友綱は半ば公的に八百長の存在を認めた上で、その排除を約束し、また同門の弟子たちにも約束させたのである。この契約書の一件を報道で知った当時の横綱常陸山は「私は力士として決して今日の相撲は友綱の云ふ様に情実相撲や八百长相撲があろうとは思わぬが友綱は夫れを認めたと云ふのだ、…本来ならば他人は弊害があると云っても取締の友綱は打ち消しを試みて徐ろに善後策を図る方が相撲道の為に利益であると思ふ」(東京朝日 明治43年1月30日)と語っている。この時の常陸山の発言が興味深い。後の日本相撲協会が外部からの八百長という指摘に対してとってきた態度はまさに常陸山の求めた対応である。すなわち、外部からの八百長との指摘については、一切ないと否定する一方、協会内部では無気力相撲の排除という形で八百長撲滅を図る。こうした姿勢は、大相撲内部の「伝統」的なロジックに由来したものであったのかもしれない。いずれにせよ、八百長の存在を前提にその排除を目指す動きは外部からしか生まれなかった。

この時にしても、契約書を書かせたのは友綱というより外部の板垣退助であったのだから¹¹⁾。

ところで、常陸山とのやり取りにおいて、友綱は稽古では決着する相撲が本場所では引分や預が多くなることが八百長の証左であるとしていた。後に、引分、預が廃止された時、八百長がなくなることも期待されていたのかもしれない。実際には、番付の重み、勝敗の重みが増したせいで、逆に八百長がなくなることはなく、星の貸借や星の売買といった八百長が行われているとの指摘は繰り返された。

大相撲は、プロレスのように勝敗や決まり手があらかじめ決められた格闘技ショーではない。八百長の取組は特定の環境にあって、大相撲の一部に発生するものである。2011年の八百長メール問題は十両からの陥落を相互に防ぐために行われた星の貸借による「互助組合」型のものだった。こうした形の八百長はカド番回避のための大関にも見られると言う。これら互助組合的な八百長とは別に、先述のように最強であることを求められる横綱を相手にした格下力士が、どうせ負けるならと負けてお金を得ようという形で行われる八百長がある。いずれの八百長もその背後にあるのは番付とそれに付着する幻想が力士たちに与えるリアルな圧力である。横綱なら横綱らしく白星を重ねなければならぬ、勝ち越しさえできれば大関の地位を維持できる、十両力士は負け越して幕下に陥落すると収入が激減する等々。真剣勝負ばかりの土俵では力士特有の体の大きさがケガを誘発するだろう。ケガによる休場で番付を落とすリスクも八百長は抑えてくれる。このように、番付に由来するリアルな圧力が力士たちの15日間に八百長の誘惑を生むのである。

一方、リアルな番付圧力は土俵を真剣勝負＝ガチンコの場合にもする。番付を上げるには、ガチンコで勝ち上がるしかない。それはアマチュア相撲の優勝者の実力でさえ、幕内力士のそれに遠く及ばないことからわかる。幕内力士たちは確かに強いのだ。大相撲では、八百長だからといって実力のない者に負けることを受け入れる者はいない。相手の実力を知っているからこそ、八百長は成り立つのである。そのためにも、ガチンコでの強さがなければ八百長に加わることすらできない。また、互いの星の貸借で番付を維持しようとしている力士たちの壁をガチンコで破らなければ上には行けない。八百長力士たちとのガチンコ勝負に負けているようでは番付を上げるなど無理なのだ¹²⁾。

噂の域を出なかった八百長がメールという形ではっきりその姿を見せたことと並んで驚愕すべきは、その報道において多くのメディアが均質な反応を示したことである¹³⁾。それを新聞の社説で確認してみよう。2011年2月3日の大手3紙の社説は、八百長を「ファンへの背信であり、大相撲の根幹の揺るがす重い事態」(朝日新聞)、「大相撲への信頼を根底から揺るがす最大級の不祥事」(毎日新聞)、「ファンへの裏切りであり、競技への信頼も根底から覆す極めて悪質な行為」(読売新聞)と一様に断じている¹⁴⁾。いずれも、大相撲を信頼していたファンを裏切ること、スポーツであることの否定、この二点ゆえに八百長が悪という論調である。良識的には間違いのない主張ではあるだろう。ここで注目したいのは、一点目の「信頼していたファンへの裏切り」という論点である。

明治の頃から八百長の指摘は何度もあったわけで、ファンがナイーブに大相撲のすべてがチンコだと信じていたのかどうかは怪しい。読売新聞は同じ社説で「八百長への不信感を持ち続けていたファンも少なくないだろう」と、ファンがさほどナイーブではないことも仄めかしており、その意味では「ファンへの裏切り」と表現とのバランスは取れていない。だが、各紙は一様に「ファンへの裏切り」を強調しなければならなかったし、せざるをえなかった。なぜだろう。それは「メディア的良識」から生まれたのだろうか。

八百長が発覚したときに関与が疑われたのは横綱でも三役でも幕内でもない、十両の力士たちであり、十両への注目度の低さと十両と幕下との待遇差の大きさを勘案すれば、それほど簡単に「ファンへの裏切り」と言えるだろうか。大相撲ファンならたしかに十両への関心も高いだろうが、ここでの「ファン」はそうしたコアな層は想定されていない。コアなファンほど大相撲に対する八百長疑惑の歴史を知っているはずである。それをあえてそのように各紙が表現したのには、各紙とも八百長が決して十両力士だけではなく、横綱以下、多くのスター力士たちが過去から現在まで関わっていることを感づいていたからではないか。というより、本当ははっきりと知っていたからではないか。事実、新聞紙上で八百長を指摘するような記事を過去に遡って探すのは難しいことではない（武田 2011: 55-64）。1972年に相撲競技観察委員会を置いて無気力相撲の取り締まりを協会が始めたのも、前年に八百長の指摘があつたのことである。だが、いつしか八百長疑惑を伝える記事は新聞紙上からは消え、週刊誌上の話題へと変わった。本場所の日々の土俵結果を伝える新聞が記者の目と責任で取組を批評し、八百長を監視すること。それは新聞紙上から久しく消えてしまったのである。大相撲を批評する相撲ジャーナリズムを新聞はいつしか放棄したのだ。八百長が行われているのではないかという疑惑を新聞も感づいてはいたはずだ。しかし、それを具体的に名指しするほどの鑑識眼を持たず、取材報道もしてこなかった。その後ろめたさがあのような表現になって表れた。毎日新聞と読売新聞の社説見出しはそれぞれ「八百長相撲疑惑過去を含め徹底究明を」、「八百長疑惑 徹底究明が相撲協会の責務だ」となっている。相撲を長年取材し報道してきたはずの新聞は、目の前の土俵に八百長の可能性を感じなかったのだろうか。朝日新聞は社説のなかで「疑われる取組をビデオで検証するなど、早急な調査が求められるのは言うまでもない」とする。「疑われる取組」を検証し指摘することを彼ら大手新聞がなぜしなかったのか。それをすべきは大相撲記者クラブ会友という特権的な立場で大相撲に接していた大手新聞他の大手メディアではなかったのか¹⁵⁾。「調査機関」なるものに調査という形で、言質を取らせ、証拠を集めさせることを許して、「取材活動」を肩代わりさせようと報道機関が社説で声高に主張することをわれわれはどのように受け止めるべきなのか。図らずも毎日新聞は「過去を含め」と見出しに書いた。過去からずっと相撲を伝え続けてきた毎日新聞が、八百長を知らずにいた「ナイーブなファン」であつたとでも言うかのようである。

新聞は、十両力士の八百長発覚を「裏切り」と感じるような「ナイーブなファン」を仮構しながら八百長批判言説を作り上げることによって、密かに自らの責務放棄を後景化したのであ

る¹⁶⁾。この不在の「ナイーブなファン」のために「真相究明」「徹底究明」が必要であり、大相撲がスポーツ競技として真剣勝負を行うことが、裏切られた「ナイーブなファン」たちの信頼を取り戻すことであるはずだ、というフィクションが生まれたのである¹⁷⁾。

八百長=悪という図式を利用したメディアによる見事な言説生産である。2006年ワールドカップ決勝でのジダン退場を、暴力=悪という図式の下で出来事の多元性を縮減してメディアが報道したことが思い出される。メディアが生み出すこうした言説に対する疑義には、「ならばあなたは八百長(暴力)を容認するのか」という問いが待ちかまえている。この安直な問いは、同時に反語的であり、それゆえ反論する余地が残されていない。八百長や暴力という悪と、健全なスポーツという善による単純な二項対立に、多元的な出来事は落とし込まれ、窒息する。背後には、新聞その他のメディアの非ジャーナリスト的態度があることを確認して次に考察を進めよう。

6. 賭博とガチンコ

大相撲の八百長が繰り返し指摘され、語られてきたにもかかわらず、2011年まで表沙汰にならなかったのには、多くのメディアの怠慢に加え、それが外部の賭博組織との接点を持たなかったことも大きい。関与する人間が大相撲の当事者に限られたことで、証拠も残りやすく、情報も外部に漏れにくかったせいである。このことは、2010年に発覚した野球賭博問題と対照的である。いったん、警察が賭博組織という外部を捕らえれば、そこから自動的に大相撲で賭博に関与した者たちに辿り着く。大相撲の八百長にはその糸口になる外部がないのだ。

しかし、野球賭博問題と八百長とは対照的な点ばかりではない、奇妙な断絶がそこに見える。それは、野球賭博を持ち込んだ賭博組織が、それにもかかわらず、相撲賭博をしなかったことである。つまり、相撲賭博と八百長を結びつけることがなかった。なぜ大相撲そのものを賭博対象に八百長を仕組むまでには至らなかったのか。なぜ賭博組織は力士たちに野球をギャンブルに変える機会を与えたに留まったのか。大相撲における八百長が先行している状況では賭博は成立しないという事情があったのかもしれないし、番付というリアルが力士たちにとっては重大事であって、外部の賭博組織に相撲賭博として関与する意志が力士たちの側に希薄であったのかもしれない。そして、何より「奇妙」であるのは、野球賭博で解雇に至った元貴闘力が八百長とは無縁なことで有名なガチンコ力士の一人であったことだ¹⁸⁾。八百長とガチンコの間には単純ならざる関係が横たわっている。通常なら八百長と賭博がつながるのだが、大相撲ではつながっていない。賭博との奇妙な断絶と接続が大相撲を理解するためのポイントになるはずだ。

ガチンコ力士はもちろん白星を目指して相撲を取るわけだが、八百長力士と違ってその日の自分の勝負の行方を知らないし、来場所の番付を知らない。他方、八百長力士たちは勝負の行方を事前に決めることによって番付を自らの手で書こうとする。八百長というあらかじめ決められた結末は、番付を予定調和に変える。八百長力士たちにとって、来場所の自分の番付は、横綱であ

り、三役であり、幕内であり、十両である。一方、元貴闘力のようなガチンコ力士にとって勝負はいつでも不可知である。実力勝負には、偶然も作用する。格上からの白星もあり得る一方、格下への黒星もある。ガチンコ力士たちのこの姿勢は、今服龍太がフルッサーを引きながら「勝敗原理を不可測の領域へと投げ出す衝動」を、ブラジルの貧しい人びとに浸透した非合法の動物賭博に結びつけていたことを思い起こさせる(今福 2008: 133)。誤解してはならないが、賭博と結びつけたからといって、ガチンコ力士たちが勝負を偶然に任せていると述べているわけではない。むしろ、すべてを偶然に任せるのは、すべてを管理可能と考えるのと同じ程度に、反賭博的である。彼らは白星の確率を高めるべく稽古を重ね、研究を重ねる。未来を予想する賭博には何らかの形で予想精度を高める何かが付き物だ。動物賭博を行うブラジルの貧しい人びとならば「民衆の迷信と、民間信仰と、夢占い師と、無数の解説書と巫女の託宣とが交錯するなかで」賭博に身を委ねる(今福 2008: 131)。思えば、あらゆる賭博には様々な予想行為が開発されているだろう。檜垣立哉は賭博についての大膽な論考のなかで、「賭けることには未来を予測する正確さの測定精度をあげることが含まれていると同時に、他方では未来を予測することの不可能性そのものが織り込まれている」と書いている(檜垣 2006: 51)。稽古と研究によって白星の可能性を上げようとするガチンコ力士たちの姿勢もまた、稽古と研究だけでは乗り越えられない未来の不可知性を織り込んでいく。その未来の不可知性が、力士たちをさらなる稽古へと駆り立てる。未来を手に入れようとする賭博の衝動は、未来の不可知性という突破不可能な壁に突き当たり続けるが、その壁は衝動をますます苛烈にする。賭博と大相撲の関係は、違法行為としての賭博が大相撲界に広がっていたという些末な面において捉えてはならない。それはまったく些末であるばかりか、的外れですらあり、大相撲を取り違えさせてしまう。大相撲においてガチンコ力士として生きることがなぜ賭博的であるのか。考えるべきはここにある。

大相撲の八百長が賭博をきっかけに明るみに出たことの意味をわれわれはもっと深く理解しなければならない。それはただの偶然ではないし、皮肉でもない。われわれはそこにある種の必然と意味を読み取り、それによって大相撲を救済する可能性を看取せねばならない。そのアプローチだけが八百長とガチンコが不可解に共存してきた大相撲という世界を語る足場を与えることができる。いま一度、賭博の哲学者、檜垣の言葉を道標としよう。

檜垣は、「ある種の社会をがんじがらめに縛り付けるセキュリティの狡猾な計算の裏をかいてみせること」、かつ、「勝つことは決して目的ではない」ことに「賭博の形式的な美学的性格」を見る(檜垣 2008: 63)。「勝つことは決して目的ではない」という言葉は、凡庸な良識を嵌めるための陥穽である。これはあたかも八百長を肯定するかのように聞こえるだろうが、決してそのように聞くべきではない。この言葉は「勝てばそれで良い」という素朴な結果主義を否定したものである。結果主義は、ただの偶然であれ何であれ、勝てば満足する。結果オーライなのだ¹⁹⁾。そのような結果主義はスポーツという本来運動かつ遊戯的な営みを勝敗という結果に還元してしか理解しない。勝敗という結果を第一にスポーツを受容する勝敗原理主義が蔓延するなか、賭博者

= ガチンコ力士たちは、勝敗原理主義を超越した勝負を仕掛け続ける²⁰⁾。

大横綱と呼ばれた千代の富士の陰でさしたる記録を残せなかった平凡な横綱、大乃国を召喚しよう。大乃国が横綱だった時、千代の富士は優勝回数を伸ばし続ける絶頂期にあった。通算7度の全勝優勝を含む優勝31回の優勝記録に、連勝記録は53である。他方、大乃国は優勝わずか2回。その上、横綱でありながら7勝8敗で負け越すという珍記録まである彼の戦績は、千代の富士と比べるまでもない。実際、当時の千代の富士の地力は図抜けていた。だが、千代の富士の記録には陰がある。千代の富士に現役最後の1045勝目を献上した元小結板井の告白によると、彼は最強の横綱千代の富士を中心に八百長を取り次ぐ「中盆」を務めていた(板井 2000)。そして、先述の横綱相手にどうせ負けるならという形の八百長を仕組んでいたと言う²¹⁾。千代の富士の記録づくめの戦績は、図抜けた実力とその実力あってこそ可能となる特殊な八百長によって築かれたものである²²⁾。その千代の富士の連勝を53で止めたのが大乃国だった。

この連勝ストップには実に大きな意味があった。大相撲の連勝記録は角聖双葉山の69連勝である²³⁾。54連勝がかかる一番は横綱同士の対戦となる千秋楽であった。すなわち、ここで大乃国が敗れると、次の対戦は来場所千秋楽。それは69連勝がかかった一番となる。それを阻止するにはNHKの大相撲中継で大鳴戸親方が口走ったように「ガチンコの大乃国しかない」(元大鳴戸親方 2011: 108)。ガチンコ力士大乃国が地力で上回る千代の富士を破ったこの一勝は、千代の富士の「狡猾な計算」による予定調和を破壊した一勝であり、それゆえ、絶対的に固有な、計算不可能な一勝なのである。「セキュリティの狡猾な計算」は見事に裏をかかれたのだ。裏をかかれた大横綱千代の富士は、土俵上で尻餅を付いた状態で放心し、平凡な横綱大乃国の手を借りて立ち上がるしかなかった。この瞬間こそがガチンコ力士大乃国の賭け金でなくて何であろう。

このように、ガチンコ力士たちは、勝負の行方を不可知の領域に置いて、一勝に賭けて土俵に挑む。それは近代スポーツ的な数量化、記録化を拒む態度である。逆に、八百長であろうと、圧倒的な地力で大相撲に君臨した千代の富士は、近代スポーツの欲望に極めて従順であった。自己に過剰なほどの鍛練を課し、自身の身体的欠陥(脱臼癖)をトレーニングによって克服して、横綱の座を獲得し、記録を追い求めた彼の姿勢は、近代スポーツの欲望を共有した多くの人びとの心にわかりやすく届いた。もちろん、ガチンコ力士たちも、同じように鍛練を課し、自身の欠点を克服しようと努め、番付上位を目指す。だが、決定的な相違は、近代スポーツの欲望に忠実であるか、それを越えた計算不可能な絶対的で固有の一勝を目指すかにある。千代の富士にとって平幕からの一勝も横綱相手の一勝も連勝記録を作る上では違いはなかった。勝利の数を数え始めたその時、「セキュリティの狡猾な計算」が千代の富士を捉えた。それは八百長批判の言説において時に口にされる意志の弱さなどとは関係がない²⁴⁾。

7. 大相撲と亡靈的八百長

大相撲における八百長とガチンコの関係は、独特である。しばしばスポーツに見られる八百長は、その競技を賭博対象とした上で胴元の操作として行われる。プレイヤーたちには「謝礼」が胴元から支払われる。しかし、大相撲においては、八百長を仕組むのは当事者たる力士である。外部の関与が見られない。過去から繰り返し八百長が指摘されてきたが、相撲賭博との関係で八百長が問題視されたことはほとんどない。大相撲がヤクザ組織との関係の根深さが繰り返し指摘されてきたにもかかわらず、である。大相撲の八百長は極めて内部完結的なのである。しかも、大相撲内部においてさえつかみ所がない。親方から八百長ではないのかと問い詰められた経験のある元力士は、その問い詰めを通じて「やはり八百長はあるのか」と感じたという（毎日新聞2011年2月9日1面）。弟子のガチンコを八百長ではないかと親方が思うほどに、そして、力士自身が親方の問い詰めを通じて大相撲内部の八百長の存在をやっと感じとるしかできない程度に、それはつかみ所がない。

八百長という虚とガチンコという実。この虚実の混濁²⁵⁾。行司と審判の分業体制という他の競技に先駆けて大相撲が導入してきた勝敗判定厳密化の装置は、しかし、この虚実の混濁を解消する方向には作用しない。この装置は、取組を決着させ、力士たちに勝利と敗北を付与することによって、番付のリアルな力を作動させる。番付に付着している欲望や幻想は、烏帽子直垂という時代がかった装束に身を包んだ行司の挙動と、紋服白足袋で土俵を囲むかつてのスター力士たちの佇まいによって加速する²⁶⁾。およそスポーツに似つかわしくない土俵周りの風景。この風景が他競技に先駆けて導入された近代的な装置であるという逆説に大相撲の矛盾と特徴が表れている。なぜ、大相撲の勝敗を司り、番付を司る者たちがこのような儀式的過剰を纏わねばならないのか。相撲における勝敗という真実、番付という真理は、フィクショナルな過剰との結託によってそのものたる資格を得るからだ。「大相撲の真理は土俵に外在するどんなところからも出現しようが」なく、「真理とは、それを真理として演出するフィクショナルな効果の賜物でもある」以上、大相撲の勝敗や番付を司る者たちには土俵を彩るために相応のフィクショナルな過剰が不可欠なのだ（澤野 2010: 121）。そして、この過剰が、番付のリアルと幻想をともに産み落とし、虚と実、八百長とガチンコの混濁した空間を創造するのだ。

八百長を虚とした。だが、それは八百長がフィクションであるという意味ではない。それは、姿を表さないが、たしかにあるという亡靈的存在ゆえの虚である。しかも、それは「昔はあったかもしれないが今は亡きもの」として扱われてきた点でも亡靈的である。勝敗という大相撲の真実は、この亡靈が憑くなかで紡がれる。だから、ガチンコという言葉はその亡靈を祓うおまじないのようなものだ。亡靈が居るからおまじないも要る。相撲協会も八百長という亡靈を捕まえるべく、相撲競技監察委員会を設置し見張らせていたが、八百長メール事件の取組を見逃してしま

うなど、失敗に終わった。しかし、八百長を発見しようとする試みは、亡霊を捕まえようとする試みであると思えば、その困難さは想像できる。ならば、亡霊の徘徊する「夜」を作らないようにすればどうだろう。支度部屋に「夜」を作らず、「昼の光」で照らし続けるのだ。公営ギャンブルの選手たちが隔離されて一定時間を過ごす場所のように、支度部屋を監視空間に変えることになるだろう。だが、監視こそがまさに「セキュリティの狡猾な計算」そのものではなかったか。結局、土俵から八百長という亡霊が去ることはない。親方でさえ、弟子のガチンコを八百長と疑ってしまうのが大相撲なのだから。

番付という大相撲独特のシステムは大相撲の興行全体を支える最重要なものである。それを捨てることのできない以上、番付に付着した幻想も捨てられないのだから、亡霊は土俵に憑き続けると考えるべきだ。ならば、ガチンコというおまじないをかけ続けるしかない。ただし、ガチンコをただ称揚するのではなく、その賭博性を擁護することによって称揚すべきである²⁷⁾。大相撲はスポーツだからガチンコでなければいけないなどという近代スポーツのイデオロギーに染まった良識に墮してはならない。その良識は八百長が亡霊的に大相撲に憑きまとうことの不可避性を知らないために、ガチンコ力士への敬意を決定的に欠いている。それは大乃国の一勝の交換不可能な価値を理解できない。ガチンコの賭博性が近代スポーツの勝敗原理主義を超越する可能性を開くからこそ、ガチンコに挑む力士たちと大相撲は魅力的なのだ。だから、われわれはその賭博性の擁護を以てガチンコを称えることにしよう。

引用文献

- 檜垣立哉, 2008, 『賭博』, 河出書房新社。
 板井圭介, 2000, 『中盆』, 小学館。
 今福龍太, 2008 『ブラジルのホモ・ルーデンス』, 月曜社。
 風見明, 2002, 『相撲、国技となる』, 大修館書店。
 金指基, 2011, 『相撲大辞典 (第3版)』, 現代書館。
 元大鳴戸親方, 2011, 『八百長』, 鹿砦社。
 宮本徳蔵, 2009, 『力士漂泊』, 講談社。
 西村秀樹, 2012, 『大相撲モラル考』, 不昧堂出版。
 根間弘海, 2010, 『大相撲行司の伝統と変化』, 専修大学出版局。
 新田一郎, 2010, 『相撲の歴史』, 講談社。
 澤野雅樹, 2010, 「大相撲における真理とは何か」(『現代思想』2010年11月号, pp.114-125, vol.38-13, 青土社)
 玉木正之, 2011, 『大相撲八百長批判』を喰う』, 飛鳥新社。
 武田頼政, 2011, 『大相撲改革論』, 廣済堂出版。
 リー・トンプソン, 1990, 「スポーツ近代化論から見た相撲」(亀山佳明編『スポーツの社会学』, 世界思想社)。

注

- 1) 本稿では、日本相撲協会、およびその前身団体によって行われる相撲を大相撲とし、相撲と表記する場合と区別している。

- 2) 中学校体育で必修化された「武道」のなかに、柔道、剣道と並んで相撲が含まれている。これも相撲がスポーツと考えられていることの証であろう。また、アマチュア競技団体である国際相撲連盟は相撲のオリンピック種目化を目標の一つに掲げている。
- 3) 優勝回数が極端に少ない横綱がその「品格」によって大横綱と呼ばれるようなことはない。
- 4) 通常の番付編成では、十両以上は原則として勝ち（負け）越しの差の分だけ番付の「枚目」が上下する。
- 5) 本稿において大相撲に関する諸規則の引用は、すべて金指基編『相撲大事典 第3版』に基づいている。
- 6) 審判規則では「審判長は、物言いの協議に際し、最終的に判定を裁決するものとする」（第十二条）となっている。
- 7) ただし、行司と審判の分業システムが必ずし判定の客観性を担保していたわけではない。引分や預りとなった取組は、星取表の上では「半星」とされたが、番付編成上は勝負検査役らによって白黒の星が付けられることが珍しくなかった。審判の裁量の余地はこのシステムによって排除されるわけではないのである。
- 8) アマチュアの相撲には男女ともが参加できる。
- 9) だから、巡業でも土俵入りが行われる。
- 10) 死に体という相撲用語にもある通り、勝負判定は本来そこまで単純ではない。
- 11) 板垣は別の場面で自身が最頂にしていた太刀山が駒ヶ嶽の最頂に八百長を持ちかけられ、それを了承したことを伝え聞き、太刀山にガチンコ勝負をさせている。契約書の翌年のことである（西村 2012: 164）。
- 12) 2011年に発覚した十両力士たちの「互助組合」の場合でも、幕下上位力士たちは本場所で組まれる彼ら十両の「互助組合」力士たちとの一番に勝つ力がなければ、そもそも十両に上られる力などないことになる。しかも、15日間取組のある十両に対して、7日間しか取組のない幕下は有利でもあるのだから。
- 13) 後述のように、大相撲の八百長は極めて内部完結的で発覚しにくい。
- 14) 以下、本章での新聞三紙からの引用は、断りのない限り、すべて同日の社説からである。
- 15) 横綱審議委員会のメンバーには、過去 NHK、朝日新聞、毎日新聞、読売新聞、中日新聞など大手メディアのトップがなっている。このことと大手メディアによる相撲ジャーナリズムの放棄は無関係なのだろうか。
- 16) そのためには「ナイーブなファン」の声も紙上に登場させねばならない。八百長メールが最初に報道された2011年2月3日の朝日新聞社会面におどる白抜きの大見出しは「八百長だったのか」「ファン『あきれた』」である。社会面が情動的な言葉にあふれがちであることを差し引いても、いずれもが「ナイーブなファン」の「声」らしきものである点は強調しておかねばならない。
- 17) ここでは新聞を実例として挙げたが、同種の論調はテレビにも見られたもので、番組に出演したり視聴したジャーナリストたちはその時の戸惑いを述べている（玉木 2011: 283 他）。
- 18) 「ナイーブ」などではない相撲ファンには良く知られていることだが、元貴ノ花が興した藤島部屋の力士たちはガチンコ勝負に徹していた。元貴闘力はその一人である。
- 19) 短絡は慎むべきだが、学校教育のなかで行われるスポーツのクラブ活動が、「体罰」や不明瞭な「特待生」「スポーツ推薦」等々の問題を引き起こす背景に結果主義があるのとは的外れではないだろう。
- 20) 賭博こそ、勝敗結果が最重要ではないのかという反論があるだろう。白黒の結果だけを賭博が重視するのであれば、なぜ世界にはこれだけ多くの種類の賭博が存在するのだろうか。賭博が遊戯であることに思い至れば、賭博が勝敗原理主義とは無縁であることを理解するのは容易である。
- 21) 千代の富士が実際に八百長をしていたことを示す物的証拠はない。板井やその師匠元大鳴戸親方など周辺の人物の証言のみである。大相撲の八百長を指摘する難しさ、また、過去の八百長を調査する難しさは、2011年2月に発覚した八百長メール事件における調査委員会メンバーが口にしてはいる通りである。だが、千代の富士がすべてガチンコ勝負だった信じるほどのナイーブさは筆者にはない。
- 22) 勝敗原理主義が、近代スポーツの記録主義と表裏一体であることは言うまでもない。勝敗原理主義は、記録を欲望する。ガチンコ横綱貴乃花引退以降、朝青龍、白鵬が優勝記録や連勝記録を相次いで作ったことは、その欲望と無縁ではない。ちなみに、横綱白鵬の連勝記録を63で止めたのはガチンコ力士稀勢の里である。

- 23) 双葉山が角聖と呼ばれ、「品格」の面も含めた横綱の理想的なモデルとされるのには、摂政賜杯以降に始まった厳粛化という変化が大相撲が経たことが大きい（西村 2012）。同時にその変化は、大相撲を近代スポーツへと双葉山の登場とも相まって馴致した。
- 24) いったい誰が千代の富士の意志が弱いなどと言えるのだろうか。
- 25) 八百長とガチンコの混濁は不可分である。たとえば、2001年5月場所の優勝決定戦、貴乃花と武蔵丸の二人のガチンコ横綱によって争われた一番である。知られているようにこの一番の前に貴乃花は足を負傷し、武蔵丸を相手にできるような状態ではなかった。だが、土俵に上がり、ガチンコ力士らしく、不可知の未来にある勝負に賭けた。他方、貴乃花の足の状態をすでに本割りで一番で身をもって知っていた武蔵丸は、それでも土俵に上がる貴乃花に戦慄した。そして、本割りでなんなく貴乃花を突き落とした武蔵丸は土俵中央で投げられた。この一番をわれわれはどう理解すればよいのか。
- 26) 行司は、本場所初日の前日に行われる土俵祭りの祭主となる。立行司が神官装束で五穀豊穰、国家平安、土俵の無事を祈願する。神道の体裁を借りた形だが、行司は神職ではない。神道の真面目なパロディを思わせるこのイベントも明らかに大相撲的真理を生み出す過剰である。
- 27) 既に述べたように、八百長にケガはない。ガチンコにしかケガが起こりえないのであれば、たとえば、公傷制度の復活は、ガチンコ力士の賭博性を制度的に擁護することになるのではないだろうか。